４番目の捜査官

米田淳一

「いやなんだよなあ。ほんと、心が痛むよ。慣れてしまったとしたらおしまいだけど、でも慣れないとつらくてなあ」
　機動鑑識のベテラン・北野（きたの）が年の瀬の残酷なほど冷たい雨の中、このひき逃げ事件の被害者を搬送する救急車を見送り、部下が残留物を探しているのを見ながら口にした。
「でも犬井（いぬい）くん、これ、ひき逃げだと思う？」
　犬井と呼ばれた刑事は、首をかしげた。線の細い高校生のような華奢な体つきで、しかもコートの上からリュックを背負っているのがまるで大学浪人生のように冴えない感じだ。
「１課長付らしく、ちょっと考えて」
　そのとおり、犬井克秋警部補は捜査１課長付という不思議な人事の結果、給料泥棒と呼ばれたり、捜査力向上研究班の準備要員と呼ばれたりと毀誉褒貶凄まじい刑事である。
　歳は２０代中頃、キャリア組ではあるが、すぐに資料課に配属されるという異例人事以来、異例ずくめの道を歩いてきた。
「すぐに分かりましたよ。このひき逃げ、おかしいです」
　ペアの木地（きじ）巡査部長が目を白黒させながら考え込んでいる。警察官らしい芯の強そうな体つきだけは犬井と同じだが、こっちは理知的なメガネ姿で、どっちがキャリアかと問われると犬井よりも木地の方をキャリアと思ってしまいそうだ。
　その木地が戸惑っているのを犬井が察し、とりあえず車に戻ってから話そう、と誘った。
「被害者の身元をあたっていますが、よくあることじゃないですか。夜中にコンビニに買い物に行った帰りでしょう。現場は都道沿いのコンビニからすぐの交差点の横断歩道、しかも雨の夜で見通しが悪い。それを携帯電話からの受電で機動捜査隊と救急車が急行、しかし被害者は外傷も大きく、また身元のわかる所持品もない。着衣もスウェットの上下で外傷以外の乱れはなし。事件に大きいも小さいもないと思いますが、これは交通事犯ですよ」
　木地がそう言うが、犬井は考え込んでいた。
「北野さんも解ってたけどさ、身元不明ってよく言うけど、身元をここまで不明にするのって、不自然じゃない？」
「事件が自然なはずがないと思いますが」
「だって、家の鍵もない、財布もない。まず、財布なしにコンビニに買い物に行くことって普通かな？　財布もカードもない手ぶらでコンビニに、なんで行くんだろう」
「そりゃそうですけど、だからといって」
　そこに犬井の携帯に電話がかかってきた。
「やっぱりだよ。近くの所轄署に公安の方々がお待ちだってさ」
「公安ですか」
「ああ。とりあえず行くしかなさそうだけどさ」
　犬井がそっと教えた。
「あそこにいる車、公安の追跡車輌だよ」

「ええっ！」
「警察ナンバーじゃないけど、あの小さなアンテナ、あれは地デジナビ用じゃないよ」
「じゃあ、公安は目の前でひかれるのを見守ていたんですか」
「いや、公安もぎりぎりで追いかけてきたらしい。まず詳しいことは所轄署で」

　所轄署では公安捜査班の何人かが待っていた。
「実は彼女、我々が探していた人間でね。とある我々のマークしていた人物と接触があったので、注意していたんだ。それなのに」
　公安班長は無念そうに拳を握っていた。
「昔だったらもっと人員もいた。彼女を探して保護もできた」
「保護？」
　木地が驚く。
「ああ。彼女は重要な事件に関わっている可能性が高かった」
「重要な事件？」
　そこで公安捜査班の班長が、長くなるが、と前置きした。
「１０年ぶりに戻ってきた、とある人間がいる。
　Ｎ４と符号で呼んでいる人間で、どれが本名かわからない」
「明らかに怪しいじゃないですか」
「そう。その彼は１０年間、海外で過ごし、数日前に成田の入管を通過し入国した。
　入管監視リストにいれて入国を警戒していたのだが、通過はあとから判明した。
　後手に回った我々が見つけたとき、彼女とＮ４は喫茶店にいた。
　Ｎ４と彼女の追尾を開始したが、Ｎ４は追尾を巻き、彼女は家に戻ったところで監視を置いたのだが、人員不足のすきに彼女は」
「公安部ってそんなに人手不足なんですか」
「捜査力向上のためにずいぶん新人が刑事部にとられ、公安部は慢性的な人員不足で、まともな追尾も出来ないのが実情です」
　公安の人間がこんなに本音を話すなんて、かつてはなかったことだ。
「ともあれ、彼女の身元は分かっているんですか」
「ええ。刑事部に渡すために用意していますが、扱いがＮ４関連として厄介で」
「Ｎ４ってなんです？」
　と木地が言いかけたとき、犬井がとどめた。
「こいつには私から説明しておきます。事情はわかりますから」
　犬井がそう言うと、公安の皆は目礼して、去っていった。
「『ナンバー』と呼ばれる人間のこと、聞いたことない？」
「いえ」
「公安が警戒対象とするテロリストだよ」
「正気ですか」
「正直、この前公安部から漏れたファイルはそのナンバーのリストだった」
　木地が思い当たったように目を丸くした。
「ナンバーの追跡は公安部の重要な任務で、そのリストは公安部の血と汗の結晶だ。リストには

テロリストとその関係者がのり、かつて公安部が強かった時代は十分に彼らを追跡して、その結果重大事件を防いできた。
　しかし、世界は変わった。公安の相手となる共産主義も北朝鮮も無力となり予算も人員もは徹底的に削られた。どの代わりに宗教カルト集団や国際テロリストがはびこっても対応しきれない。
　そのかわりにＮシステム、Ｍシステムが入った。Ｍシステムは秘密だが、市街地のスーパー防犯灯の情報を解析する公安の顔認識追跡システムだ。公式には存在しないことになっているが、それほどなりふり構っていられないのが公安の現状だ」
「犬井さん詳しいですね」
「そりゃそうだよ。一応キャリアの端くれだからそういう話は普通に分かる。
　そこで公安と刑事部の共同捜査、という話になって、僕は１課長付になって、君と組んでいる」
「犬井さん話してくれなかったじゃないですか」
「僕なりに文脈を追ったけど、確証がないし、しかも君をこう言うことに巻き込むのは嫌だった。秘密ってのはひどく重い荷物だから」
　木地は考え込んで、そして聞いた。
「犬井さんの電話って、どこに繋がっているんですか？　やっぱりキャリアの仲間の方ですか」
「どうしてそう思った？」
　犬井は微笑んだ。
「大倉さんと鈴谷さんという名前が時々出てきますね」
「なんか、君に取り調べられてる気になったけど」
「すいません」
「いいさ。僕も君のそういう聴力と推理を買ってるし、１課長もそれで僕に君をつけたんだから。正直に言おう」
　犬井は声を整えた。
「鈴谷さんは警視庁公安部長、大倉さんは警察庁経由で内閣官房の対テロ捜査担当参与」
「むちゃくちゃ偉い人達じゃないですか！　しかも刑事部にいて公安部長とホットラインなんて、ばれたらスパイ扱いじゃ」
「緩んでいる組織なりに、なんとかしようと皆が動いているから、驚くことじゃないと僕は思ってたけど、やっぱり驚いたね」
「そりゃそうですよ」
「ただ、その二人もなかなか口が堅くて、僕には全貌がつかめない」
「情報は現場には小分けにして伝える。それは公安のよくある話じゃないですか」
「とはいえ、今はウェブもある。秘密化したクラウドコンピューティングで厳しく個人に与える情報を監視しても、監視の監視はどんどん犯罪への対応速度を落とす。
　そこで鈴谷部長は改革を考え、大倉参与とともに警察の統合組織化を進めようとした」
　その時に電話がなった。

「被害者の身元が判明した。今から彼女の自宅を調べる」

「きれいなもんですね。几帳面な方だったんでしょう」
　みな白手袋をして、指紋などの採取に影響の内容に備えて、部屋に入っていた。表では制服警官が現場保全のためにこの寒い外気の中、立っている。
「判明した身元は佐津川鹿子（さつかわ　かのこ）。都内の経済シンクタンクで事務の仕事をしていたそうです。刑事部も調べて、怨恨・金銭トラブルは全くみあたらないとのこと」
　木地が警察用携帯端末の情報を読み上げる。
「検死も済みました。病院到着時にはすでに死亡、死因は臓器破裂、死亡推定時刻は公安部班が彼女を見失った４０分の間です」
　犬井と木地たち、公安部捜査班のみなが黙祷した。
　そののちに見分を始めた。
「関係人も調べましたが、来年成人式で高校時代は図書部で本を読むのが好きな普通の女の子であり、淡い恋愛はあるものの関係人と呼べる程ではなかったようで」
　犬井は部屋の中を見渡した。女の子らしく、タロットカードの本があり、トランプのハートの４のカードが壁のコルクボードに飾られていたりする。飾り方がなかなか洒落ている。趣味のいい女性だったらしい。
「なるほど」
　鑑識の北野もやってきた。
「北野さん、おかしいと思いますか？］
「犬井くんも気付いたんだね」
　木地や公安捜査班の皆がわからないという表情で見上げた。
「まず写真を取って、それからこのテレビの裏を見ればわかる」
　鑑識の一人が写真を取り、その次にその薄型テレビの台の裏を見た。
「やっぱり。さっき、少し表側から外れた端子が見えてました」
「なんですか？」
「テレビとレコーダーとその増設ハードディスクの配線がでたらめ」
　見るとそのとおりだった。
「でも鹿子さんが配線を間違えていることもあり得るのでは？」
「このランプを見て。ほら、ちゃんと予約録画の予約が入ったまま。
　テレビやアンテナ端子とつながっていないレコーダーでなにを録画予約したんでしょうか。不自然だよね。それとこの生ごみも」
「普通に生ゴミ箱に入っていますよ」
「納豆の食べた後の容器が生ゴミ箱にそのまま入ってる。この保温性のいい温かい部屋なら納豆菌が増殖してすごい匂いになる。それにもう一個の納豆容器はきちんと小さなビニール袋に封をして捨ててある。彼女は突然この納豆の処分をかえたのか」
「犬井さん細かすぎますよ」

「いや、こういうのすごく気になるたちで」
「犬井さん、こういう所に気づくねえ」
　鑑識の北野もあきれるが、犬井は結論に達したようだ。
　そして犬井は今度はクローゼットを見た。
「木地君、見てごらん。服が異様に少ない」
「ほんとだ、がらがらですね」
「ここから大手町の研究所に行くには今の時期、冬物が必要なはず。しかしあるのは夏物の服が少し」
「ヘンですね」
「行こう。北野さん、あとをよろしくお願いします」

「どういう結論です？」
「多分、鹿子さんは拉致されかけたところで逃げ出し、そこを轢かれたんだ。しかもその前には衣服を脱がされた。しかし性目的とは別の目的で」
「何かを探されたんでしょうか」
「おそらくそうだ。その経済シンクタンクも気になるが、この年末年始の休みでだれもいない。任意での事情聴取も滞る。これまでいくつかの難事件が年末年始におきて、未解決となっている」
　思い当たる節は木地にもある。警察官は警察一家としてかつては末端の警察官の不祥事さえも気に病むほどつながっていたのだ。だからこそ、未解決事件については、遺族の気持ちと、それに接する現場の辛さを共有している気持ちがある。
「こう言うことをまゆも動かさずにできる連中といったら？」
「日本にそんなのがいるとは思えません。いたとしても例の宗教集団が最後だと」
「希望を言っても仕方がないよ。正直、こういう特殊任務が出来る組織は」
「言いたくないですけど、公安には歴史の昔そういう組織があったと」
「あとは北朝鮮やヤクザも考えたが、動機については検討もつかない。
　大体に置いて、この子をそんな目に合わせて、しかも最後に轢き殺すほどの理由はあるんだろうか。
　その罪については我々の範疇ではない。それは検察や司法の世界だ。
　だが、僕はこれを見過ごせない。
　問題は動機だ。Ｎ４もわからないし、『Ｎ４との接触』なんてスパイ小説の世界の言葉じみすぎている」
「でも、公安班は大真面目でした。やっぱりそれだけＮ４は危険な人物なんでしょう」
「どんな人物だろうね。そこから調べようか」
「調べられます？」
「頼むしかないよ。幸い、鈴谷公安部長は味方になってくれると思う。警視庁公安部新橋庁舎へ行こう」

　いつ見ても警視庁新橋庁舎は外からみると独特の建物だ。普通のオフィスビルとして見過ごしそうな、地味な建物だが、開発された汐留の中で地味すぎて目立ってしまうこともない、本当に良く考えられた建物だ。
　しかもこの庁舎の入口では、同じ警察官である犬井と木地に対してさえも公安部の警官によるチェックがある。
　凄まじい警戒ぶりだ。それから奥には公安部部長秘書官という婦警がやってきて、「GUEST」のIDカードを渡して、その上で彼女が同行するという徹底ぶりだ。
　そしてエレベーターに乗り、上階へ上がる。
「公安部長はこちらです。お話ください」
　部長秘書官が案内する部屋は、うず高く積み上げられたプラモやフィギュアの箱でいっぱいの部屋だった。それが普通の警察官僚の要職の執務室らしい荘厳さを、すっかり台無しにしている。
　これが公安部長の執務室、と思うと、『こち亀』の両津勘吉が出世したらこうなるだろうな、というマンガ脳的な発想になって頭が痛くなりそうだ。
「Ｎ４についての情報開示、電話で請求されたけど、これが厄介でね。でも、これは君たちに調べてもらう上で僕の口から語るしかない」
　箱の向こうの影に隠れて鈴谷は見えないが、声は犬井と似た雰囲気の若い声だ。
「実はね、Ｎ１は」
　鈴谷はためらったが、言い切った。
「僕なんだよ」
　犬井も木地もびっくりした。
「正直に言おう。バブルの頃に警視庁警察庁、公安と刑事部の間だけでなく、県警同士の争いまで縦割り組織の弊害としてあった。
　そこで、その縦割りを自由にスルーして危機管理や大規模犯罪に対応できる広域捜査指揮官を創設する計画があった。
　そのために国家公務員試験１種をクリアしたキャリア警察官僚をさらに８人にまで選抜し、訓練し、制度的にも準備した。それがＮ１からＮ８だった。僕はＮ１の暗号名で呼ばれた。僕はその訓練の中で他の７人に会っているが、名前も来歴も知らない。知ったところでそれが本物かどうかなんてわかりっこない。
　しかし、その計画が最後でずっこけた。政権交代が起き、警察の人事が総入れ替えになった。そしてその直後に例の宗教テロも起きた。
　いくつもの未解明事件が発生する中、この強い権限を持ったＮナンバーの人間が逆に恐ろしく思えた人物が複数いた。どういう意味で恐ろしいのかは別として。
　それを察したＮナンバーの人間は僕以外は全て海外へ身を隠した」
「鈴谷部長はなぜ残れたんですか」

「僕は逃亡しなくても、すぐ死ぬと思われて計算に入れられなかったんだ。当時難治疾患にかかっていたからね。そこで僕は捜査１課４係、今のＳＩＴの創設に関わる係の隣に５係を作った。
　これがまた皆便利に使える情報の墓場と思う連中がいた。警察は必然的に処分に困る情報を抱えるように出来ている。捜査上の秘密や個人情報がどんどん警察には集まり、それを処分するには専門の知識がいる。もちろん未解明事件もそうだ。
　そこで組んだのが大倉参与。当時は大倉瑚珠、警部補だった。瑚珠くんと呼んでいた」
「女性だったんですか」
「ああ。でも僕と違って武芸満点の立派な子だった。とある事件では情報の錯綜の中、ＳＡＴと衝突までしたんだよ」
「武闘派だったんですか」
「まあ、そういうことになるね。女性離れした体力の持ち主だった。いまでも官邸がテレビに映るとき、見きれて映ったりする。いくつかに事件の後、瑚珠さんはノンキャリ、一般採用の刑事だったのに、どんどん重用されて今は官邸に勤務するテロ対策の内閣参与。日本版ジャック・バウアーみたいなもんだ」
「そうだったんですか」
　二人はため息をついた。しかしそのプラモとフィギュアの箱の向こうではエアブラシの空気音が聞こえるほかは、とぼけた、それでいながら涼やかな声だけで、姿が見えない。
「で、なんでＮナンバーが恐れられるかというと、警察の中に第二の警察を作るほどの人脈とメカニズムを持てるのがＮナンバーの広域捜査官の権限だったんだ。みな指揮所演習でそれをやって、全国各地にＮナンバー指揮官のシンパがいる。
　そりゃ怖いよねえ。警察と検察を押さえたのに、そこにさらにアヤシイ組織が作られて統制が乱れるなんて、使う側にしては目障りだ。
　そこで僕は公安部長、公式に滅多にでない人事でここに閉じ込められた。
　秘密ごと死ぬと期待されたけど、どういう因果か、僕の病気はほとんど回復してしまった。これもこまるだろうね。
　でも今の僕には手足となるべき実力はない。すべて公安部長のもとにいる公安理事官が指揮する。僕はその調整をするしかないし、理事官たちは理事官会議を事実上の決定機関にしてしまった。高位高官無為無力。よくある話だ。
　で、ここで僕からお願いしたいんだけど」
　鈴谷の手が箱の山の向こうでひらひらとふられた。
「僕とホットラインを持った君たちに、動いてほしいことがある」
　犬井と木地は目を見合わせた。
　決意は同じだった。
「いいでしょう。でも僕たちは、単なる手足になれるほど忠実にはなれません。警察官として、警察のやりかたと齟齬を起こすのは許せない」
「大丈夫それは。僕も警官だしね」
　鈴谷はあっさりと認めた。

「じゃあ、話そう。この事件の見立てだ、まあ、そこにソファがあったと思う。座って聞いて。秘書官に飲み物オーダーできるけど、何にする？」
　犬井は「ブラックコーヒーを」といい、木地は「カルピスありますか？」と聞き、鈴谷は笑った。
「これで決まったね。話そう」

　鈴谷は話し始めた。
「よく売国奴って言うけど、国って売れるものなだろうか。
　国は不動産でもないし、法人とも違う。民族とも違う。ここらへんの解釈は複雑だけど、結局は国家としての統合が国だとすれば、国を売るというのは難しい話だ。特に日本のように統合された国では、その下に政府も民族もあると考えると、その統合を破壊しなければならない。中国の学者がそれを言ってえらいことになったけど、事実日本は簡単には売れない。政府を売り、不動産を売っても、日本そのものは売れない。
　しかし、それを逆用している人々がいる。好き放題に国の借金をふくらませる人々が。何かといえばすぐ国としての対応を求め、応分の負担や責任の所在というと、官僚だけでなく皆が口を濁す。
　国として入るお金の二倍を使う、三流の財政なのに、子どもじみた『世界一でなければダメだ』という。そんな無理をしたところで、財政的にドーピングしまくった『持続できない世界一』に何の意味があるのか、というとものすごい勢いで槍玉に挙げられるのが現状だ。
　特にその借金が日本人が国債として持っているとはいえ、いずれ一斉に相続が起き、そこで相続税を上げながらその相続の対象に国債を考えたら？　発行した国債がなんと発行した日本に戻ってくる。債権の処理としてこんなとんでもないことがあってはならないんだ。
　まさにでたらめ、国債は肩たたき券以下の紙くずになる。
　それでいいという人々だけだったらいいかもしれない。
　しかし、それは嫌だという人々はいる。なんとかその頃合いを見計らって売り抜けようとする人々はいる。それは善悪とは無縁に存在するだろうね。
　色々な考えがあるが、彼らは結局国を国債売りという形で国ごと売ることになる。売らなくても債務不履行、日本政府が借金を返せなくなる可能性は十分にある。
　今の政権は日本は沈まない、国債も返せると言っているが、実際は彼らは必ず沈むだろうし、沈むつもりで嘘と裸の王様の服の仕組みで言い繕っているだけだ。そう彼らが思っていないとしたら、彼らの目は節穴だ。
　そのなかで、その日本が破綻する瞬間をどうするかのせめぎ合いが起きているのが現状だ。公式にしていないが、もともと公安警察の前身は内務省警察、選挙結果まで予測できる調査能力を持っている。破綻の瞬間の予測は容易なはずだ。それを使えば、一部の人々はその債務不履行の瞬間というババ抜きで勝てる。
　ただ、それを公に調査することは危険過ぎる。そこでＮナンバーの８人のうち、僕を除いた７人はどうなるか。彼らを味方に付けられれば、警察を自由に利用できる。事実警察官僚は天下りしながらそのババ抜きゲームのプレーヤーとして情報をやり取りしている。
　そして、ゲームに勝つためには、勝ち方を確定することであり、それは不確定要素を排除することと同じだ。
　Ｎナンバーは不確定要素にもなれば、価値を確定する要素にもなる。

　そんな彼らに憤るのは僕もそうだし、君たちもそうだ。それは他の誰かも同じで、そのために公安の秘密が漏れた。
　日本版のウィキリークスが冬に発生したが、馬鹿げた酔っ払い役者の騒ぎでマスコミはそのニュースを封じ込め、それと同時に同じ漏洩でももっと目立つ領土をめぐる犯罪の映像漏洩を問題として騒ぎ、隠蔽した。
　あの映像にいたっては秘密指定すらしていなかったという話もあるが、例によって日本の言論は嘘も百回言えば本当になる状態だ。何も信頼できない。嘘を嘘と見抜いて自衛するしかない。
　で、そういう中で、売り抜けるババ抜きのタイミングを彼らはジャパンクランチと密かに呼び、その情報戦を繰り広げている。
　だが、そんな情報がオンラインに載ったら、すぐに出し抜かれる」
「ということは、鹿子さんはその情報を、オフラインでやりとりする連絡の仕事をしていたんでしょうか」
「そう。さすが犬井くんだね。今の日本では閉鎖系と公開系のネットワークをエンジニアが作っても、それを使う人間がその概念を理解していない。だから容易に簡易だからとセキュリティをおろそかにするし、エンジニアもその対処に根本的な方法をとれない。経営者や意思決定責任者がその概念を持っていないんだ。だからパスワードが６組も必要な馬鹿げたオンラインバンキングの銀行も未だに存在する。
　情報管理の要諦は、管理にある。絶対にもれないという無謬性などあるはずがない。情報工学として考えるなら、漏洩は必然的にあると考えるべきだ。重要なのはその漏洩を制御し、極限することだ。漏れる前提で対策を用意することが大事だ。だが、日本では未だにもれないことを前提にして、漏れてから大騒ぎをしている」
　鈴谷は説明して、息を吐いた。
「長い話ですまなかったが、Ｎ１の僕は無力化され、Ｎ４は僕の同期だ。そして、日本で何らかの組織をつくろうとしているのかもしれない。他のＮナンバーの人間は、それどころかそういう組織を作ってババ抜きゲームで動いているかもしれない。
　そのゲームの中で、彼女、鹿子さんは、そのゲームのシンジケートの情報運搬をやっていた。書類を運んでいたかもしれないが、３ミリ角のマイクロSDメモリーカードでも数十GBの容量がある。おそらくそれを運んでいたんだ。そして、それを奪うために、彼女を拉致しようとした」
「ひどい！」
　犬井が叫んだ。
「マネーゲームのために彼女が犠牲になったなんて」
　鈴谷はそうだね、と声にした。
「女性に取って裸体を顕にされるのがどれほどの恥辱だったか。しかも彼女は多分何も知らなかったのだろう。しかしシンジケートはそれを疑い、そのマイクロカードを探して家の中をひっくり返し、さらにそれをもとに戻した。時間が間に合わず、完全な復元には失敗したが、犬井くんには見破られた」
　鈴谷はまた息を吐いた。

「Ｎ４の帰国がそのトリガーになったのかもしれない。Ｎ４はその責任を感じるだろう。とすれば、やることは一つだ。ババ抜きのために死んだ彼女の無念を晴らすために、そのババ抜きのプレイヤーを出しぬいてゲームを終わらせてしまうだろう」
「しかしどうやって」
　その時、鈴谷と犬井と木地の携帯電話が一斉に通知音を上げた。
「まずひとつはこの実情のリーク。だが、それでは不十分なことはすでに分かっている。
　次は、もう情報世界の外で事件を起こすしかない」
「事件って、どんな」
「マスコミが無視し得ない事件。しかもそれがそのババ抜きのプレーヤーである必要がある」
　鈴谷は秘書官を呼んだ。
「警察捜査情報端末に、今その可能性のある人物の位置情報が表示されていると思う」
「それは禁止事項では」
「僕にはその権限はある。だが、Ｎ４の位置はつかめない」
「ＮシステムもＭシステムも」
「ああ。シンジケートの息がかかっている。信頼性は期待できない」
「手詰まりですか」
「いや、僕にはもう一つ権限がある。
　それはすでに岐阜を出発した。
　それが君たちに情報をくれる。
　頼んだ。Ｎ４の暴走を止めてほしい。
　Ｎ４はおそらくプレーヤーを盾に立てこもり事件を起こそうとすると思う。
　でも、ババ抜きはすでに終わろうとしているんだ。
　それに、そんなことをしても、彼女の無念を晴らすことにはならない。
　Ｎ４は冷静さを失いかけている」
　犬井と木地は端末を見た。
　地図の上に、マークが表示され、一つのマークは円で囲われて、その円が狭まっている。
「詳しいことは後だ。その円の域内にいるＮ４を拘束してくれ」
　犬井は応えて、木地と共に走りだした。

　そして、その捜索円が、日比谷のホテル付近でついに点になった。
「犬井さん、岐阜を出発したって何なんでしょう」
「ある程度わかっているけど、それよりＮ４を拘束するんだ」
　とある政治家ＯＢが一流ホテルのロビーをを出発しようとしていて、それを民間のセキュリティ要員、ボディーガードが守っている。

　そして、男が近づいた。
「あれだ！」
　飛び出ようとした木地とはべつに、その前を通りすぎようとする女性に、犬井が声をかけた。
「おわかりですね。私、警視庁のものです」
　女性は頷いた。
「なるほど。なかなか優秀ね。鈴谷が選んだだけはあるわ」
　女性は頷き、それに政治家は腰を抜かしてロビーの絨毯の上にへたりこみ、失禁していた。
　女性だったんですか、Ｎ４は？！
　という木地に、犬井は頷いた。
「ちょっと離れましょう」
「ええ」

　喫茶店の外の大型屋外ディスプレイに、日本政府に対して国際通貨基金機構が勧告を発表し、すべての経済市場が混乱しているというニュースが流れていた。
「ババ抜きは終わったわね」
　女性は慎み深い、まるでかつての財閥系の社長夫人のようなノーブルさを持っていた。
「私がＮ４。名前はいくつもあるけれど、Ｎ４だけが私のすべてを識別する。しかしよくわかったわね」
「彼女との面会の画像が寸前に届きましてね」
　犬井が肯き、木地に悪かったと謝った。
「でも私が女性だということはすでに分かっていたわね」
「ええ。鹿子さんの部屋のコルクボードにトランプが飾られていました。それはハートの４。偶然の一致と思いましたが」
　犬井は証拠品の容器を見せた。
「ここにセロテープでマイクロSDメモリーカードがついていました。こういう発想は男はなかなか思いつきません」
「なるほどね。でも、本当に気の毒というよりも、私は私も、シンジケートも許せない。罪を償いたい。私たちＮナンバーの力で、彼女を守れたかもしれない。だけど、皆どこにいるか、今ではわからない」
「大丈夫です」
　Ｎ４が驚いて目を丸くし、そして懐かしさを浮かべて涙すると、そこに鈴谷公安部長がやってきていた。
「つらいね。事実を知るというのは。真実なんて、もっと残酷だ。
　シンジケートの実行部隊について、もうＮナンバーのもう一人はあぶり出しを始めた。
　いずれ警察の通常の犯罪として起訴され、罰を受けるだろう。もと警察官の服役生活がどんなものか。それでも罪には軽いが」
「そうね。彼女に話したとき、彼女は驚いていた。淡い恋を抱き、未来を、数カ月後の成人式を楽しみにしている子に、この運命はあまりにもひどすぎる。
　でも、彼女は最後に私とわかれるとき、市井の人間にも覚悟はありますから、いいですよ、と言っていた。ああいう子が何人もいる。
　だから日本という存在は生き延びてきた。
　内務省警察や官僚組織が日本を支えているんじゃない。
　ああいう若者たちと、その親と、そのまた親が、みな犠牲を払いながら守ってきたんだと。
　でも私がいくら涙しても、命は戻ってこない」
「つらいですね」
「で、私をどうする？　私はどうなっても構わないわ」
　犬井は鈴谷とアイコンタクトした。

「あなたがやったことは、日本に帰ってきて、旧友と連絡して、そして鹿子さんと喫茶店でお茶して、最後にシンジケートの一端のあの議員の前に現れただけです。犯罪用件はありません」
「でも、クランチのための引き金を引く、日本のクランチを探り合う複数シンジケートについての調査ファイルを送信した」
「現在の日本にはそれを処罰する法律はありません。民間機関のデータの漏洩は民事事件の親告罪、警察としては民事不介入ですし、しかも親告罪を取り上げることもできない」
「逮捕できないってわけね。それが海外からの強制力発動による日本の国家主権を直接脅かすものだとしても？」
「外患誘致のことですよね。ええ、たしかにあなたのファイルは国際的な強制力発動の動機にはなります。
　でもそのファイルと国際強制力による日本への制裁の因果関係を立件するのは困難。
　特に警察にはそれが難しく、検察でも手に余る。となるとその外には」
「政治ね。でもその政治の次元での議論を楽しみに待っているものがいる。
　日本が危機に陥っても、そこで火事場泥棒をしたい人間がいる。
　そしてその火事場泥棒のために加担するものも」
　彼女は吐き捨てるように言った。
「とはいえ、現場ではそれぞれの立場でそれぞれにそういう危機を防ごうとしている」
　犬井はそう言い切った。
「そのなかに鹿子さんを拉致し、殺害した実行犯がいる」
　Ｎ４は顔を歪めた。
「そう。しかし、みな剣を振るったと言って手を責めるトカゲの尻尾切りを始める」
　鈴谷がそう続けた。
「この大きなババ抜きゲームという犯罪のなか、鹿子さんのことの実行犯もまた被害者。
　でも私たちのそれぞれの罪深さが彼女に集中しただけ。
　その公の仕事をするものとしての罪深さを共有していることだけが、これまでの海外潜伏の間、私を支えていた。
　彼女のような市民を守るために、彼女のような市民を犠牲にする決断をせねばならない立場も、公にはある。
　それを分かっているからこそ、忍び、耐えてきた。
　しかし、そこで踏み違える公のものもいる。
　言葉巧みにその公を言われ、それを信じてしまうのも私たちであり、私たちの仲間。
　辛かった。どちらも地獄の決断だった。
　そこで私は、彼女を守りたかった。
　そして、守れなかった以上、罪を負うべきだと思った。
　だから貴方達に逮捕されなければ、自決したかった」
　Ｎ４はそう言って拳を握った。
「でも、しないでしょ？」

　鈴谷が言うと、彼女はきっと目を向けて、そして言った。
「ええ。あの馬鹿げたプレーヤー共が地獄を見るのと、彼女の仲間たちがこの国を本当に立て直すのを、しっかり見届けていこうと思うわ。
　でも、また新たなババ抜きが始まることも分かっているけれど、彼女の仲間たちを信じるわ」
　鈴谷と、そして犬井と木地も頷いた。
「鈴谷公安部長、岐阜から出発した「目」って、なんですか」
「ああ、これだよ」
　鈴谷はタブレット端末に表示した。
「岐阜航空基地の航空自衛隊航空実験団で装備化を研究しているアメリカで開発された無人偵察機、ＲＱ－４「グローバルホーク」だ。
　アフガンでビンラディン探しに使われているもので、３０時間無着陸で高空を周回飛行しながら偵察衛星をはるかに超える精度で地上を監視する。
　日本にもその運用チームはすでに用意されていて、実験していたんだ。
　僕の得意は彼らとの連携だから」
　犬井はその奇怪な姿に見入ってしまった。
「でも、これでよかったのかしら」
　Ｎ４はそう言って考え込んだ。
「いいんです」
　鈴谷は言い切った。
「それは判断できる未来の人々に、委ねましょう」
　Ｎ４は涙を散らして頷いた。
「そうね」

>EndText